

# ポリネシアに於ける「口誦傳承」の習俗と社会組織

池 田 源 太

## I

日本の文献に見える所謂「<sup>かたりべ</sup>語部」の性質、機能については、現在十分な資料が無いため、これを明確に知ることは困難である。また我が國古代には、「<sup>かたりべ</sup>語部」という太古以來の古序を誦誦することを職とした部民があり、その誦誦の内容が、多く古事記、日本書紀に採録せられたという從來の一般的な考え方を否定して、これ等の文献は編纂当時少數者の或る目的の爲に作爲する所であるとの説が行われていないこともない。

然し、現在に於てもあらゆる文学的、歴史的表現が記録に依ることなく、従つて皆口述に依る外はない文盲の未開種族があることは認めなくてはならない。また、現在記録には所謂文明國語を以つてするが、極めて近代に至るまで、文盲の状態にあつたというものもあることも疑われない事實である。なお更に遡つて考えるならば、今日文字が発達し、豊富な文献を持つている文明國民にしても、豊富な文献を持つている文明國民にしても、発展段階として、嘗つては、かゝる状態を一應経て來たものであることも、否むことが出来ない。この意味に於て、我が國の如きも、上古文字の無かつた時代のあつたことは論を俟たない所であり、口述に依つてのみあらゆるものが表現せられ傳へられていたことは、古語拾遺の、「老少口々相傳。前言往行存而不忘。」という証言を俟つまでもない。この点から考えて、若し日本に上代、語部というものがあり、我が國の歴史に関する古序を語り傳へたならば、如何なる性質のものであつたであろうか、ということはお我々に取つては、打ち消し難い興味である。

こゝに於て、私は、試みに日本の文献に見える語部とは一應引き離して、民俗学的立場に於て、太平洋民族、ことにポリネシアに於ける「口誦傳承」の習俗を明らかにして見ようと思うのである。これに依つて、或は、我が國記録以前の口誦傳承の性質を推測する暗示が得られるかも知れないし、また仮に得られないにしても、これに依つて、少くとも、あらゆる「記録せられたる歴史」「History recorded」に先行すると考えられる「語られたる歴史」「History told」即ち、クロージェの所謂、「生きた記録」「Living document」としての歴史の性質を理解する何物か得られるであろうということを期待する。

## II

文明、未開を問はず、現在世界諸民族の間に於て、文字やその他の記録表象に依ることなくして、たゞ口授に依つてのみ、古來の傳承を保持しているもの、または極めて近代に至るまでこれを保持していたものは、少くないと思われるが、その代表的なものとして、西半球ではケルト人、南半球ではニューゼーランドのマオリがことに有名であり、屢々民俗学者、人類学者の間で取り上げられている。<sup>(1)</sup>

マオリ人の間では、<sup>トプンガ</sup>司祭たる家の重なる任務は、古來の族長等の長い系譜を、その族長等の業績

と共に、父から子、子から孫へ口づからに傳えることであつた。その上、マオリ人は、この言い傳えを司祭<sup>トフンガ</sup>のみに委ねることに満足せないで、付の家々の長老や物識り達も、親ら家の系譜と傳説とを暗記しており、その子孫に教え、公の席上で司祭等の系譜の暗誦を聴取し、これを試験し、訂正する権能を持っていた。かゝる点から言つて、マオリ人の記憶力の熾んなことは、著名の事実でシモンズ氏は、

「マオリ人の長老達の心は、原始的な物語の倉庫であり、或者は四百五十の歌を暗記し、千四百の名前を連ねる系譜を述べる事が出来る。」<sup>(2)</sup>

といつて驚嘆している。かゝる司祭<sup>トフンガ</sup>の傳承は極めて嚴格なもので、一言一句でも誤りを犯さない様に注意が拂われ、万一誤りを傳えるようなことがあれば、神の怒に触れて、死か、または何か他の不幸を以て罰せられるという本能的な恐怖が生ずるまでの信仰が彼等の社会に発生していた。<sup>(3)</sup> それ程マリオ人の間では、系譜が社会的に重要性を持っていたのである。

彼等の間では、初めて人を訪問した際に、第一発せられる質問は、「貴君は何処から來たか。」ということである。この表現の意味は、「貴君の出自は如何」ということである。これに対しては「自分は何々というもので、某々の子孫である。」と答えることになつている。

またニューヂーランドでは、貴族<sup>ランガチラ</sup>は、家々の長男から成り立ち、部族の首長は、この貴族の中から出ることになつてゐたが、かゝる家々の長男等は、その家の系譜を常に暗記している必要があつた。彼等の間では、冠婚葬祭に伴う饗宴は一般にハカリ<sup>ハカリ</sup>と呼ばれ、他種族や、他氏の首長等が招待せられて来る。時として、これ等の首長等のいづれが階級的に最高のものに属してゐて、食物の最初の配分を受けるべきであるかの問題が相當に論ぜられ、争われることが起る。この際、この紛争をを解決するものは、その系譜の尊卑である。即ち、問題の首長、乃至その所属の司祭<sup>トフンガ</sup>は、祖先代々の名前を連ねた系譜を暗誦し、その出自と階級とがマオリ人がニューヂーランドに定着した初期の頃にまで遡ることを証明せなければならず、これと対抗する首長、または司祭は、また自家の出自と階級の如何に旧く、且つ高いかを、暗誦に依つて立証し、両者の比較に於て、優劣が決定せられることになつてゐた。

また首長は、土地の一部や、川の一部を、タプーに附する権能を有し、この域内に庶人が立ち入る時は直ちに死の罰を蒙るとせられてゐたが、仮に或る首長が、川の一部をタプーに附している期間に、他部族の首長が独木舟に乗つて、この域内を通過しようとする事があれば、こゝに二者のタプーの強さが問題となつて来る。この際、この問題を解決するものはまたその系譜であつて、二者は、各々長い自家の系譜の暗誦を行い、その優劣に依つて、そこに附せられたタプーが、他の首長に依つて破れるか、否かと決定するのである。

而してこれ等の場合、系譜の優劣は、如何に旧くから継続しているかということに依つてゐるが、これを決定する最後のものは、彼等の社会に特有なその「長子性」<sup>First-bornness</sup>である。即ち、系譜を遡つて長子の数が多い程、その系譜の尊貴性は増大するのであるから、父も、祖父も、曾祖父も、長子であることは勿論、遡つて、幾代、長子が継続しているか、この系譜の尊貴性の問題を解決する最後の鍵である。女子は直接「長子性」に関係していない様であるが、然しなお、母、祖母、曾祖母等、いづれも長女である系譜がより尊貴な系譜であるから、この意味に於ける母系の長子の数は、系譜の優劣を決定する補足的條件であり得る。<sup>(4)</sup>

一般にかゝる系譜尊重の習俗は、主としてその社会の嚴格なる階級性に依つて支持せられてゐると見なければならぬ。換言すれば、平等を尊ぶ社会に在つては、系譜が重要性を持つことは出来ないのである。パウル、ラディン氏が、世界諸民族の間に於て、階級性の特に著しいも

の代表として、マオリ人を取扱っている様に、その階級性の厳しいことは、彼等の社会の著しい特色である。氏に依れば、彼等の社会は、貴族、平民、奴隷の三階級から成つていて、貴族の基礎には、既に述べた長子性があり、あらゆる家の長男が、部族の貴族を形成してをり、就中、長男、長女の結婚に依る長男が最高の階級に属し、次男以下の男の兄弟、及びあらゆる女子は平民であつて、戦争に依る捕虜は奴隷である。

家の延長したもので、多くは三、四世代を含む、五十人から百人の家族を擁するものをフワナウ“Whanau”(群家)といい、この中で最も長子性の強いものが首長となる。但し実際的には、この長子性と結合する経済力、指導力、その他の能力才能等が要求されている。(5)

フワナウ(群家)より大なるもので、十乃至十五世代を含み、家族数百人を擁するものをハプ“Hapu”(氏)と言い、ハプ(氏)の連合して一村を形成しているものをパア Pa(村)と言う。パア(氏)は周囲に深い堀を回らして、その内部のものは共同防衛に当り、村落社会を形成している。群家の首長に関する原理が、氏及び村落にも及んでいることは勿論である。たゞ氏の首長は自己所属の氏人と、その奴隷以外には実際の権能は持つていない。

かかる組織を持つてゐるマオリ社会に於て、系譜の優劣は、その儘またその社会の階級の上下を意味するものであるから、首長や司祭等が、系譜を厳格に保持することは、やがてまた自己の社会的地位を維持することを意味しているとせなければならない。この理由に依つて、マオリ社会の、少くとも上位階級にあるものは、自己の尊貴性を維持する爲に、彼等の優秀なる系譜を常に記憶し、要求に応じて、何時如何なる場所でも、誤りなくこれを暗誦することが、社会的に要求せられているものである。仮に系譜の傳承を怠る首長や司祭があるならば、彼等は實際問題として、階級的に直ちに顛落の外ないからである。

この外マオリ人が、その系譜を厳格に保持する理由には、土地の所有権の繼承に関する問題が考えられている。

マオリ人は、漁業と農業とをかねた種族であるが、特に土地に対しては異状な執着を持つてをり、この土地の譲り嗣ぎについては、非常な重要性を置いている。一般に、土地は群家よりも、氏が所有しているが、この土地の所有権の繼承の基礎にはまた、その系譜の正確な傳承が要求されている。この故に、彼等の間では、結婚前の放埒な生活にも拘わらず、結婚後は血族の正統を乱さない爲に、謹嚴な生活が営まれていることが指摘せられている。(6) この事は社会的な問題と並んで、経済生活の面に於て、系譜が嚴重に保持せられ、傳承されなければならぬ大きな理由である。この事と関連して、吾人は、多くの未開社会に於ける無形財産の存在する事実を想起せざるを得ない。

即ち未開社会に於ては、土地、家畜、貨幣、漁場、狩場、等が財産として数えられているのは勿論、この外に、歌や説話の言葉、祈禱の文句、神話、咒術の法から、人の名前に至るまで、所有権が認められてをり、いづれも重要な財産の一部と見做されていることが一般に民俗学者に認められている。(7) 現にロエブ氏はポリネシアのニウエ島民について、

「漁場は財産と数えられている。特に魚の多い溜りは尙更の事である。家や武器、その他器具は個人の財産で、遺言に依つて受け継がれるが、歌や咒言の傳承は、家の財産の一部と見做され、代々傳えられる。名前も、その家族の間で用い傳えられ、その家族以外ではこれを用うる権利が無いものである。」

と報告している。(8) マオリ人の場合でも、この系譜が社会的地位を裏書き、土地の所有権を認める等の有形財産から一應切り離して見ても、一般的にそれが重要な財産たる性質を持ち得

ることに理解出来るのである。況んや、こゝでは、土地の所有権と、社会的地位と、系譜の保持、とは表裏一体のものであつて、氏に傳わる幾十代の首長の名前と、これに附帶する様々の挿話とは、その儘その氏人の共同の財産であつて、他民のものゝ侵すことの出来ない性質のものであることを認めなくてはならない。

註(1) “Anthropology,” by Sir E. B. Tylor vol. II. 1881.

“The Science of Folk-lore.” by A. H. Krappe. 1929.

(2) “The role of the aged in primitive society,” by Leo W. Simmons. 1945.

(3) “Maori and Polynesian, their origin, history and culture,” by J. Macmillan Brown. 1907.

(4) “Social Anthropology,” by Paul Radin 1932, chap. VII.

(5) Ibid.

“Cooperative and competition among primitive peoples,” edited by Margaret Mead 1937, chap. XIII The Maori of New Zealand, by Bernard Mishkin.

(6) “Maori and Polynesian,” by J. Macmillan Brown.

(7) “General Anthropology” E.M. 226 1938 chap. VIII.

“The economic organization of primitive people,” by Ruth Bunzel.

(8) “History and tradition of Niue,” by Edwin M. Loeb. Bishop Museum Bulletin 32. 1926.

### III

如上の如く、系譜の保持が社会的にも、経済的にも強く要求せられているマオリ人は、たゞ漫然と、この系譜の傳承を、糾纏する社会の自然の勢に委ねているのではない。そこには、一つの宗教的な意味を有つた学校の組織がある。それは、「フアレ、ワナンガ」(Whare-wananga) (傳承学林と) 稱する一般人には厳しくタブーに閉せられた建物の中で行われるもので、教授の方法も、たゞ口授に依るのみである。(1)

マオリ人の系譜が、廻るところ神々に発している様に、この系譜に関する神聖な知識の起源も、また廻る所神々の世界に続いている。彼等の所傳に依れば、この知識は最初に、「イオ」(Io) 神から、「タネ」(Tane) 神に傳授せられたもので、「フアレ、ワナンガ」(傳承学林) も、最初は十二天上界の最高の所に設けられていたもので、往古は、「ランギアテア」(Rangiatea) と呼ばれていた。(2)

こゝには、イオ神を祀り、イオ神の侍者達が、「ランギアテア」を護つていた。現在ポリネシアの島々に散在する「フアレ、ワナンガ」(傳承学林) はすべてこの天上の「ランギアテア」の型に倣つて建てられたものであるということになつている。

マオリ人の間に於ける系譜の保持、並に傳承が重大であると同様に、この「フアレ、ワナンガ」(傳承学林) も、社会上極めて重大な機関として認められて來たことはもとよりである。一般に、「フアレ、ワナンガ」の開始めは冬の月で、入所する生徒の資格は、貴族、及び司祭の子弟たることである。而してここに入所するものは、傳習の時と、内容とに依つて、凡そ三つの階級に分かれている。その最高級は、日の出から正午までの間に行われ、内容は宗教的儀禮に関する知識の傳授と、実習とである。次は、正午から日没までの間、主としてあらゆる種部の部族の歴史、即ち系譜と挿話とからなる説話の傳承で、第三級は、日没に始まり、あらゆる黒咒術 “Black magic” に関する傳授である。但し、この時間は、嚴格に何處でも行われている訳ではなく、所に依つては全部夜間に行われている。

生徒は十二才頃に入所し、完全になるまでには、三年乃至五年出席せねばならない。生徒が「ファレ、ワナンガ」(傳承學林)の中に入ると世俗の衣類を脱ぎ、特定の衣類を着する。司祭と生徒以外は何人もその屋根の下で食事をしたり、眠ったりしてはならない。彼等の中、誰でも眠氣をもよをしたならば、それは永く生きていない兆候だと考えられている。

傳授の始まる前に、司祭は最高神たるイオ神に対して祈願の言葉を捧げるが、その言葉は、極めて旧く、現在では廃せられているものが多い。開口の祈願の末尾には次の様な句があつた。

「深くも、這入りますように。  
あらゆる知識の  
その根源にまで、その始まりにまで。  
おう、隠れた面の、イオ神様。  
あなたの新発意述の、  
全得の、その根本にまで、  
泌み入らせ給え。  
願わしき智慧、あなたの子息が。  
  
次には、あなたの智慧や、  
あなたの思想が、落ちて行きますように、  
心の底にまで。  
  
おう、賢人、イオ神様。  
おう、あらゆる聖なる  
智識の神たる、イオ神様。  
  
おうあらゆるものゝ祖である  
イオ神様。』<sup>(3)</sup>

この祈願が終ると、「ファレ、ワナンガ」(傳承學林)の建物の中にある、あらゆるものは更に一層厳しくクブーに附せられ、神々は親らここに影響して、教えを垂れるものと考えられている。傳授が進行して行くにつれて、生徒は常に試験せられ、誤りは訂正せられる。

司祭が暗誦したアオテア部落の系譜の始めの部分には次の様な名前が連ねてあつた。

- |    |   |    |   |           |                     |                   |                       |                          |                     |
|----|---|----|---|-----------|---------------------|-------------------|-----------------------|--------------------------|---------------------|
| 1  | テ | コ  | レ | 'Te kore' | (空虛)                | 'The void'        |                       |                          |                     |
| 2  | テ | コレ | ツ | アタヒ       | 'Te kore-tua-tahi'  | (第一の空虛)           | 'The first void'      |                          |                     |
| 3  | テ | コレ | ツ | アルア       | 'Te kore-tua-rua'   | (第二の空虛)           | 'The second void'     |                          |                     |
| 4  | テ | コ  | レ | ヌ         | イ                   | 'Te kore-nui'     | (茫莫たる空虛)              | 'The vast void.'         |                     |
| 5  | テ | コ  | レ | ロ         | ア                   | 'Te kore-roa'     | (遙かに拡がりたる空虛)          | 'The far extending void' |                     |
| 6  | テ | コ  | レ | パ         | ラ                   | 'Te kore-para'    | (乾かむびた空虛)             | 'The sere void'          |                     |
| 7  | テ | コレ | フ | イフ        | イア                  | 'Te kore-whiwhia' | (手中になき空虛)             | 'The unpossessing void'  |                     |
| 8  | テ | コレ | ラ | ウエア       | 'Te kore-rawea'     | (喜こはしき空虛)         | 'The delightful void' |                          |                     |
| 9  | テ | コレ | テ | クマナ       | 'Te kore-te-tamana' | (かたく縛られた空虛)       | 'The void fast bound' |                          |                     |
| 10 | テ |    |   | ポ         | 'Te po'             | (夜)               | 'The night'           |                          |                     |
| 11 | テ | ポ  | テ | キ         | 'Te po-teki'        | (たれこめたる夜)         | 'The hanging night'   |                          |                     |
| 12 | テ | ポ  | テ | レ         | ア                   | 'Te po-terea'     | (漂よう夜)                | 'The drifting night'     |                     |
| 13 | テ | ポ  | フ | ア         | フ                   | ア                 | 'Te po-wha-wha'       | (呻く夜)                    | 'The moaning night' |

14	ヒ ネ ル ア キ モ エ	'Hine-ruaki-moe'	(苦しき眠の娘)	'Daughter of troubled sleep'
15	テ                    ボ	'Te po'	(夜)	'The night'
16	テ        ア        タ	'Te ata'	(朝)	'The morn'
17	テ ア オ ツ ロ ア	'Te ao-tu-roa'	(待ち構えたる日)	'The abiding day'
18	テ ア オ マ ラ マ	'Te ao-marama'	(美しい日)	'The bright-day'
19	フ    ア    イ    ツ    ア	'Whai-tua'	(空間)	'Space'

「空間」<sup>フマイツ</sup> 'Whai-tua' の中には、形無き二つの物が在つた。それは男性の「濕氣」<sup>マホラヌイ</sup> 'maku' と女性の「空の大きな絨がり」<sup>マホラヌイ</sup> 'Mahora nui-a rangi' とで、この二人から、風の祖トコムア 'Toko-mua' 雲の祖トコロト 'Toko-roto' 霧の祖トコバ 'Toko pa' が生れたが第四番目にランギボテキ 'Rangi-potiki' が生れ、これはパパ 'Papa' を妻にして神々を生んだ。一という風なものであつた。

斯くの如き系譜は若い貴族の子弟等にとつては、單なる名前の連鎖にすぎないものであるかも知れない。然しそれは一言一句、口写しに注意深く記憶に留めなければならないものである。(4)

勿論この制度は、古來からの傳承を古來の儘に、間違いなく、後世に伝える爲のものと、系譜に関する智識が神話に統いている様に、この傳授の方法も記憶し難い古代から統いていると信ぜられている。この制度が、かく宗教的性質を持つてゐるものであるから、系譜や宗教的儀礼も、神の信仰の篤いのにつれて誤りなく傳承されたことと一應認められるのである。それは、この社会に於て、タブーが不文の中に間違いなく行われていると同様であると言つてもよい。神々は、常にこの傳承に誤りはないかと嚴重に監視し、一言一句でも誤り、または、省略した場合は死の刑を以て罰するとかたく信ぜられていることは、タブーの自働的刑罰と同じ性質である。或る傳に依れば、「カノニコ、マラテスト」'Canonico malatesto' という者が、誤つて公衆の中で、一言を省略した爲に、八月の第一日旺に、ゾオモ寺の鐘樓に雷火が落ちた。(5) と考えられている様なのはその一例である。

かかる傳承保持の習俗は、たゞマオリ人の間に於て嚴格に行われているのではなく、ポリネシアの他の島々に於ても、或いは類似した形で或いはやゝ異なつた形で発見せられたことが多くの調査に依つて明かである。

即ち先に触れた如く、「フアレ、ワナンガ」(傳承学林)はポリネシアに散在していると言われている通り、若干の變化はあるかも知れないが、一般にこの學校組織は多少なりとも他の島々に於て存在すると認めなくてはならない。

リントン氏に従えば、ソサイエター群島では、首長の子孫で、数代の間、島を出ていた者でも、歸つて來てその系譜を暗誦することに依つて二度昔の權利を取りかへすことが出来るというのである。この理由で、この島では系譜は家の秘密として嚴格に保持せられる。勿論この際、權利請求者は、試験をせられ、これに依つて相應の所に置かれるものである。(6) かゝる社会であるから、ソサイエター群島のタヒチ島では、司祭養成の學校と教師養成の學校とがあつた。ここでは司祭は世襲で、男子の年長者が系統の優先権を持つてをり、且つ神が先主であると考えられていたと同様に、司祭は肉体的にも缺陷のないことが要求されている。司祭養成の學校では、これ等の條件を満たす生徒が集まつて、宗教儀礼に要する知識と実修とを修得するもので、その方法は勿論口授である。學校は各々神聖な場所に建てられてあり、傳習の内容には、寺での祈禱、公衆の前で行う宗教的、または政治的演説、戦争の際の歌、並びに呪術等である。

これに対して、教師は、廣い意味では<sup>トフンダ</sup>司祭に属するが、男女共にあり、所謂賢人としての重要な職で、あらゆる種類の知識を持っていなくてはならない。かゝる教師を養成する学校での傳習の内容には、歴史、紋章、地理、天文、占星、神話、時間、数、季節、並びに系譜に関する事、等である。就中、この系譜は、これに依つて彼等の年代記を区切る世代を計算するものであるのみならず、一般にこの群島に於ても、土地の所有権と密接な関係を持っていたので、特に重大な主題であつた、と報告せられている。<sup>(7)</sup>

またヘンデイ氏の調査に依れば、このソサイエター群島では、土地の境界は、岩、山脈等の自然の標識に依らないで、長い狭い石で示されている。この石は土中深く埋められて、地上に一呎程頭を出してをり、これを動かすことは重大な社会問題を惹起するものである。その起源は全く記憶せられない時代のことに属し、恐らくは、呪言や、犠牲を伴つた儀式を以てする靈的の承認を経ていることであろうと、氏は解釈している。此の島では、一体に家の資産は、「家の寺」<sup>マツエ</sup>“Family marae”に属してをり、此の分は直系に相続せられ、その他の土地や、家や樹木や、独木舟等個人の財産は、遺言に依つて随意な人に相続せられる。かくの如く、土地の相続は大いに家の系譜に依つて制約を受けているので、系譜は極めて注意深く保存せられて來たし、また、今も保存せられている。首長とその家族は「フィ、アリイ」“Hui-arīi”といつて、第一階級に属しているが、このフィ、アリイの家族には、必ず口誦に依つて家の系譜を保持する役目を持つた者があつたが、現在は文字に依っている。<sup>(8)</sup>

尚、この島のことに關しては、既に十九世紀の初頭、ウィリアム、エリスが数年間滞在してその見聞録<sup>(9)</sup>を書いているが、彼に従えば、<sup>バラフド</sup>タヒチ島人の歌は一般的に、歴史的小唄であつて、これを土語で「ウブス」“ubus”と言つている。その取扱う主題に依つて、性質は色々に異なっているが、唄の数は極めて多く、社会のあらゆる方面、並びに歴史的の多くの時代に亘っている。子供等は早くからこの唄を<sup>ウブス</sup>習い、好んでこれを<sup>ウブス</sup>誦する。唄の多くは、神々に関する傳説や、その業績、乃至は優れた英雄や首長の功績に關したものであつた。ことに彼等の間に於て、過去に起つた事実について何か議論が起つた場合には、この唄が一種の標準、或いは古典的權威とも言うものになつた。公開の席で<sup>ウブス</sup>誦が行われた際時としてこれを行つた者の反對黨の演説家や、年代記者達に依つて質問が寄せられることがある。かゝる場合に決定力を持つ記録が無いので、他の唄を<sup>ウブス</sup>誦してこれに對立させるが、この對立は時に頑強な紛争を捲き起すこともあつた。然しまた時には、一聯句の歴史的小唄を誰かが引合に出して、この紛争が解決することも珍しくない。エリスが示した一例は、一七八八年か八九年かに、船長ブライ Bligh が、バウンティ “The Baunty”号に乗つて、パパラ灣に碇泊中に起つた、或一つの事件についてである。問題の事件というのは、バウンティ号の碇の浮標が紛失したことであつたが、これについて村民は二派に分れてしばらく争つたが、互いに反對意見を得心させることが出来ないでいる際、或る一人が、次の一聯句を<sup>ウブス</sup>誦した。

「泥棒の様な男、泥棒のタレウ ‘Tareu’ が

ブライの浮標を盗んだ。」

この唄は大抵の人がよく知つていたものであつたので、論争していた二派を満足させて、結論に達したというのである。

この他サモア島については、次の様なブラウン氏の記録がある。

サモア島人の間では過去の事実の記憶は、詩乃至話の中に保存せられてをり、これ等は口授によつて代々傳へられた。唄や詩は、ただに、マヌアに於てのみならず、サモア島のあらゆる所に

於て嚴重に後見せられ、父から子、または家族の他の者に傳えられた。彼等は如何なる意味でも記録表象を持つていなかつたので、事件を記録する唯一の方法は、記憶に委ねる外はなかつた。而してその正確さを保持する爲には、不斷に暗誦し、何回も繰返すことであつた。その役目を委ねられているものは、「ツラファレ」「Tulafale」と呼ばれる、辯舌家とも言ふべき階級のもので、その社会では特に勢力を有つていた。彼等の唄や話には熱心に耳を傾ける批評家があつて、原形から少しでも脱線すると直ちに訂正が加えられる程神聖視せられていたので、我々が想像するよりも遙かに正確に傳わつて行くものである。<sup>(10)</sup>

またマーキサス島についてはリントン氏が、次の様に述べている。

「出自に力を入れる組織に在つては、系譜が最も重要である。マーキサス島の人々は、初めの部分は明らかに神話的であるが、八十代の系譜を述べる。二十乃至三十世代を録する眞実の系譜は全く普通の事に属する。すべての生れのよい土人は、その系譜を暗記している。何となれば、彼等が土地又は何か他の役目に對する權利を樹立する爲には、何時でもこの系譜に訴えなければならぬからである。」<sup>(11)</sup>

またハワイでも、詩人は死の苦痛をかけて彼の首長の系譜を一言一句を間違えず、暗誦せなければならなかつたと言われ、更に、彼等の間では、歌の種類に所謂「名前の歌」「Name song」というものがあるが、これは子供が生れた際に作られるもので、祖先の話を累代の名前と、ともに歌つたものであることが注意せられている。<sup>(12)</sup>

フランツ、ボアス氏はハワイで、

男の、リイク、ホヌア、	Lii-ku-honua, the man,
女の、オラクホヌア、	Olaku-honua, the woman,
男の、クモホヌア、	Kumo-honua, the man,
女の、ラロホヌア、	Lalo-honua, the woman,

のように續けて十七対の男女の名前つらねのべる歌を持つ例や<sup>(13)</sup> また、

夫の、フリホヌア、	Huli-honua, the husband,
妻の、ケアカフリラニ、	Keaka-huli lani, the wife,
夫の、ラカ、	Laka, the husband,
妻の、カバパイアケレ、	Kapapaiakele, the wife,
夫の、カモオアレワ、	Kamooalewa, the husband,
妻の、ナナワヒネ	Nanawahine, the wife,

と續けて二十七対の祖先の名を連ねる歌を持つてゐる例を挙げている。<sup>(14)</sup>

かゝるものがその古俗傳承の系譜的部分であらうと思われる。

またウィリアム、エリスが、ハワイを旅行した時、案内の青年マウアエ“Mauae”が、エリス一行を連れて、久々に彼の郷里カイム部落に歸つた。この時家々から、彼を知つてゐる多くの人々が出て来て、彼の後に随いて行き、或いは彼の名前、両親の名前、彼が誕生した際の事情、彼の家族の歴史の最も著しい事件等を折込んだ歌を歌ひ乍ら、ぞろぞろ歩いて來たことを報告している。エリスはその歌の一部を次の様に訳出している。

マウアエという名前を、 [註] マウアエ Mauae 青年の母の名

どんな風に我々は言い表わさうか！

おうー マウアエ、ホルアでは名うての女、

土地をよく耕す女、 [註] ホルア Horua 土人の遊戲の名

土地を耕す女には



漁夫を授けて下さいませよう。

それでお前達二人の土地は、

仕合せになるだろう。

夫は漁夫で、

妻は土地を耕す者。

年寄や、若者の爲に、

食物を作り、

仲よしの戦士隊の爲にも

食べ物を作つた。

友達の命をたつとび

ツイテラニの爲に、

〔註〕 ツイテラニ = Tuitelani 酋長の名

土地を耕した。<sup>(15)</sup>

かゝる方法に依つて、ハワイの家々の系譜及びこれに關聯する家の歴史事實は、後世に傳つて來たものである。

斯くして、一般にニューゼーランドを始め、ポリネシアの各地では、系譜がことに重んぜられ、これを諷誦に依つて保持する爲の組織や風習を近頃までも保存し、なお現在でも一部分は保存し続けているであらうと思ふのである。

これ等の事實を見來つた後で我々の考えることは、近代の記録文化になれたものは、記録に依存するあまり、こうした記憶力が著しく減退しているのに比べて文字を持たない種族、民族にあつては、訓練に依つて相当の程度にまで、記憶の能力を伸ばすことが出来、且つその記憶のみに依る所傳も、我々が普通に想像していたよりは遙かに永い間、原形より餘り外れないで傳わり得るものであるということである。

然し、かゝる強力なる記憶力を必要とする傳承は、これを持つ種族の大きな精神的負担でなくてはならない。而してその勞力と負担とを敢えて惜しまないという点に於て、その種族が文化的には進んだものを持つていると見る外はない。そこには、その記憶力を支持するその社会の社会心がなくてはならないのである。

註(1) “*whare*” とはマオリ語で「家」、ワナンガ “*wananga*” とは同じく「話」*lore* を意味しているが “*Whare-wananga*” は “*School of Learning*” と訳されている。

(2) ポリネシアに属するソサイエター島に “*Raiatea Island*” というのがあるが、これはラングアテアに因んで命名されたものであると言われる。

(3) “*Myths and Legends of Polynesians*” by Johannes C. Andersen, 1928.

“Enter deeply, enter to the very foundation,

Into the very origin of all knowledge,

O Io the hidden Face !

Let penetrate to the very roots of the,

understanding of the neophytos,

Thy sons the desired knowledge,

Let fall on then thy knowldge, thy thoughts.

To the very foundation of the mind,

O Io the wise ! O Io of all holy knowledge !

O Io the Parentless !

- (4) "Maori Life in Ao-tea", by Johannes C Andersen. 1907.
- (5) 'Myths and legends of the Polynesians' by J. C. Andersen.
- (6) "Ethnology of Polynesia and Micronesia" by Ralph Linton 1926.  
Field museum of natural history.
- (7) "Ancient Tahiti" by Teuira Henry, Bishop Museum Bulletin 48. 1928.  
教師の学校の名は、土語で、Fare-haa, Piiraa" (house of learning)という。
- (8) "History and Culture in the Society Islands" by Z.S. Craighill Handy. 1930.  
Bishop museum Bulletin 79.
- (9) Polynesian Researches during a residence of nearly six years  
in the South Sea Islands" by William Ellis 1820.  
"O eia e Tareu eta  
Eia te poito a Bligh"  
"Such an one a thief and Tareu a thief,  
Thieved (or stold) the buoy of Bligh"
- (10) 'Melanesians and Polynesians. their life, histories, described and compared'  
by George Brown 1910.
- (11) "Ethnology of Polynesia and Micronesia" by Ralph Linton 1926.
- (12) "An Introduction to cultural anthropology." by Robert H. Lowie. 1934.  
"The spell of the Hawaiian Island and Philipines" by Isabel Andersen 1919.
- (13) "Race, language and culture." by Franz Boas. 1940.  
"Stylistic aspect of primitive literature"
- (14) "General anthropology" 1938. chap. XII 'Literature music and dance' by  
Franz Boas.
- (15) "Narrative of a tour through Hawaii or Owyee by William Ellis 1826.  
"Name of manae  
how shall we declare !  
O manae, woman famous at 'horua'  
Woman tilling well the ground  
Give the fisherman,  
To the woman (who) tilleth the ground.  
Happy will be the land of you two,  
A fisherman the husband.  
The wife a tiller of the ground.  
Cultivated food for the aged. and the young :  
Food for the company of favourite warriors  
Regarded the life of the friends.  
Cultivated for Tuitelani."

III

然らば、ポリネシア人の間に於いて斯くの如く口誦傳承の豊富であることは、如何なる社会組織の

中に育成せられ、如何なる社会心によつて支持せられていたであらうか。

この事について最初に我々の注意に上つて来るものは、ロエブ Loeb 氏がニウエ Niue 島の調査の上に立てた、系譜傳承に関するポリネシア型とメラネシア型の二つの型の事である。ロエブ氏に依れば、凡そ太平洋民族間に於て、家系傳承について二つの型があり、ポリネシア型は極めて遠い祖先、即ち神々にまで遡り、跡づけることの出来る直系系譜である。これに比べてメラネシア型はたゞ三代乃至四代を遡るのみで、而もそれは殆んど分家系譜である。

前者は出自に依つて家の貴族性を考える人々の間で重要視せられ、後者は、出自が土地の所有権と密接に関係している人々の間に於て認められる。ニウエ Niue 島もフィジー Fiji 島も共にポリネシアに属しているが、ニウエ島では寧ろ系譜のメラネシア型が行われ、フィジー島では二型が結合している。従つてニウエ島では土地財産に対して権利を主張する時に必要なためにのみ家長乃至氏族長はその系譜を記憶しているとしか考えられないので、系譜も五代、最も多くて七代より遡ることはない。(1)

なお、この事に関しては、ブラウン氏も同様な見解を有し、ニューブリテン島人とサモア島人に例を取つて次の様に比較している。

メラネシアのニューブリテン島人は、過去の出来事に関し記憶を保存する方法は何等持つていない。従つて種族の歴史に関する知識は殆んど無い。仮にあつたとしても、それは自分の生涯か乃至は父の代の事に限することで、貿易船の來航とか、または彼等が直接知り合になつた船長の名前位である。これに対してポリネシアのサモア島人の間では系譜が重要であり、且つその系譜が極めて遠い時代にまで遡るものである。即ち初めに、「立岩」Papatu と「地岩」Papaele とが結婚し、「緩石」Maataanoa (Loose Stone) を生み、緩石は「泥」Pala-pala と婚し、「無」Le-tupa-fua よりの成長「Grown from Nothing」を生み、これが最初の間人 Tagata となつた。これより次々に多くの世代を経て、彼等の最後の酋長マリエトア Malietoa にまで誤りなく続いている。而してこれらの系譜は詩や説話となつて保存せられ厳重に守られて來たというのである。(2)

この二氏の調査を見るに、文字其他の表象を持つていないことは双方同じであるこの二者の間に、系譜傳承の点に於て斯かる相違のあるのは果して何処から來るのであらうか。

さきに私は、マオリ人が特に長い系譜を保持した理由の一つに、系譜が所有権と直接に関係のあることを数えたのであるが、このメラネシア型とポリネシア型との比較に依つて数えられるのは、土地所有権というものはポリネシア型である天地開闢以來の長々しい系譜の傳承の第一的的目的ではないということである。土地所有権の継承の爲めのみであれば、メラネシア人の様にその系譜は、三四代乃至四五代の世代に遡るのみで充分であるからである。ポリネシア人が非常な勞力を惜しまず、斯くも長い系譜を暗誦することは、其の事の中に目的が含まれていると考えざるを得ないのである。というのは系譜を實際に司祭から習得して、これを生涯銘記してをる首長の側では、他人に取つては恐らくは無味乾燥な名前の連鎖に過ぎないものであつても、その長い系譜とこれに附帶する様々の祖先の功績が、自己の社会の階級組織に於ける尊貴性を基礎づけるものであり、そこでは自らが神々や、英雄の直系の子孫であることの誇りがなくてはならない。この尊貴性に対する誇りがある爲め、系譜が單調であつたり、長かつたりすることが勞力の負担にならないのみか、寧ろ漸次長くなる傾向さえも理解せられるのである。恐らくは系譜傳承の極く初期に於ては、半神半人の英雄神に遡るのみであつたものが、永い年月、多くの口を経るにつれて漸次、開闢神話とつながつて來たものであらうとさえ考えられる。而してかゝる尊貴の身分

に対する誇りは、必ずや、祖先崇拜の信仰が強く働いている厳しい階級制度の、貴族社会に於て最もよく育成せられるものであることは自ら明らかな所である。アレキサンダー、クラツプ Alexander Krappeは散文説話について、

「散文説話 “Prose saga” は第一に家の説話 “Family saga” で、主として家系に関連を有つてをり、廣い意味での祖先崇拜の信仰と関係がある。かくてかゝる説話は、本質的に貴族社会に於て繁栄するものである。」<sup>(3)</sup>

といっているのは、ポリネシアの場合に於てその儘運用出来る説である。ポリネシアの首長の階級が、実際に貴族社会であることは、既に述べた所であるが、これは、ポリネシア人が一般に所謂「太平洋の貴族崇拝家」“Snobs of the Pacific”<sup>(4)</sup> として知られている通りである。而してこの貴族社会を支持しているものは、彼等の間に於ける首長の長子相続性 “Primogeniture” による世襲制であり、この世襲制に依つて彼等の階級組織が確立しているのである。

これと反して、メラネシアでは、首長の職は世襲ではない。この事実は、彼等の間に於ける系譜傳承の発達せない重大なる理由であると考えられる。この事は、ポリネシアの中でも、メラネシアの影響の多いと言われる＝ウエ島の場合を見ると容易に理解せられる。

＝ウエ島では、階級は粗々三階級に分れていて、その第一階級は、トア “Toa” と言い、戰士から成つてをり、殊に勇敢に敵陣に飛び込み、中の敵を殺した人々の階級である。第二級はフェカ、フェカウ “Feka-Fekau” と言い、トア階級の召使で、憶病な、戦争では氣絶したり、また出陣もしないで、家でぐずぐず過していたものから成つている。而して第三階級は、島の流浪者である。<sup>(5)</sup>

これを以て見るに、ここに第一階級と言うけれども、これは他のポリネシア地方に於ける様な父祖傳來の社会的地位と、特権とを持つた絶対的なものでないことは自ら明かな所で、仮に卑賤に生れても、能力と勇氣とを持つて來れば一應第一階級のトアに上る資格は出来る訳である。従つてこれを以て厳格な階級制度の社会であると言うことは出来ないもので、ここには個人の能力というものが社会的地位の基礎にある。従つて彼等のトアが、生れ乍らの貴族たるの意味は大いに薄く、彼等がその祖先の系譜の長さを誇る理由も亦従つて稀薄であるし、ここには、系譜の傳承の繁栄する素地が見出されないのである。家長が、僅かに五代多くて七代の家系を傳承するに止まるのは、土地所有權の繼承にはそれで足りるからである。＝ウエ島の宗教は、決して祖先崇拜という如きではなく、アミズムの状態を出ないと言われていることも、またこの島が精神的文化の進歩していないことを示すものである。ロエブ氏が、この島に於ける系譜傳承の貧困は司祭の無い爲であると結論しているのは一應理由のあることではあるが、更に根本的な理由としては、首長の世襲に依る階級の尊貴性が欠如していることに依ると見る外はない。また司祭を必要とする社会に未だ、たち至っていないとも言えるのである。

此の問題とひき比べて考えられるのは北米土人の間に於ける種族の首長に文武二つ型のあることである。

パウル、ラディン氏に依れば<sup>(6)</sup> イロクオイ族では、首長に “Peace chief” 又は “Civil chief” とも言うべき Sachem <sup>セイチエム</sup> という首長と、“War chief” というべきものが存在する。セイチエムは、イロクオイ族の諸連合体の間に在る諸会黨に参加するもので、その職は世襲であるのに対して戦争首長 “War chief” の職は個人の過去の功績に依つてをり、その就職期間は一代乃至不都合の無い限りの期間となつている。彼等の間では一度セイチエム会黨に於て他の種族に対して戦が宣せられると、村々の戦争鬨鳴り、赤く染つた戦筏が立てられる。そうすれば、

誰でも戦家を組織して戦争行爲を開始してもよい自由が與えられている。従つて戦争首長 *war chief* は、どの種族、どの民族乃至どの家からでも出る可能性がある。セイチエムが、種族の或る特定の民族、乃至家に限られて世襲的に決定しているのと異なる所である。

こゝでは、世襲と非世襲の制度が歴史的、傳統的なものを重んずる社会心と、個人の能力を重んずる社会心とに支持せられ乍ら同一社会に平行的に存立している。即ちポリネシアは型としては、セイチエムの和平首長型であり、メラネシアは戦争首長型である。

ポリネシアで此の二者が並行的に存在しているのは、マンガイア *Mangaia* である。此処では開闢神話に連がる神聖系譜を保持している多くの部族長と、戦争の勝利によつて獲得する一時的首長 “Temporal Lord” とがあり、後者をマンガイアと呼んでいる。(7)

ポリネシアに於ける口誦傳承の繁栄は、直接には斯くのごとき、社会の階級性の保持と密接な關係を持つてゐるが、更に進んでは、一般的に未開社会乃至は古代社会に於て特に認められる、「傳承の神聖性」に歸せられるものであること、もとよりである。即ち彼等の間に於ては、斯る部族や氏族の傳承は、假に神義を含んでいても、不合理であつても、寧ろその故にこれを眞実であると信ずる所謂、“*Credo quia absurdum*”(不條理なるが故にわれ信ず) という心境があることを認めなくてはならない。かゝる世界に於ては、傳承は、天変地妖のごとき自然界の秘密と類を同じうし、その内容は「奥儀的教授」“*Esoteric teaching*” に依るもので、結局は、未開古代的宗教心に依つて支持せられてゐると言わねばならない。

この面については獨立して、他日論ずる機会を得たいと思う。

註(1) “History and Tradition of Niue” by Edwin M. Loeb, Bishop Museum Bulletin 32, 1926.

“The Fijians a study of the decay of custom.” by Basil Thomson. 1908.

(2) “Melanesians and Polynesians their life histories, described and compared” by George Brown 1910.

(3) “The science of Folk-Lore” by E.H. Krappe chap.V.

(4) “History and Tradition of Niue” by Edwin M. Loeb.

(5) Ibid.

(6) “Social anthropology,” by Paul Radin.

(7) “Mangaian Society” by Te Rangi Hiroa (P.H Buck) Bernice P. Bishop Museum Bulletin 122, 1934.